

短期交換留学プログラム留学生のための英語で行う授業の 日本人学生への開講ニーズ調査

恒松直美

調査目的

本稿は、2005年2月に行った広島大学学生のアンケート調査¹に基づき、広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）留学生向けに開講されている英語で行われる授業を広島大学の日本人学生にも開講することについて、日本人学生がどうとらえているかをまとめたものである。アンケート調査表の題目を「『広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）留学生のための英語で行う授業（英語圏の大学・大学院相当の授業）の日本人学生への開講ニーズ調査』：～日本人学生への開講に向けて～」とし、全学の学部生及び大学院生に配布した。目的を「HUSAで留学生に開講されている英語で行う授業を留学生のみでなく、日本人学生にも開講していくための調査」とした。

このアンケート調査の集計結果に基づき、広島大学の日本人学生が、英語で行う授業の日本人学生への開講をどの程度希望しているのか、学生は国際社会の中で大学に何を求めているのかについて、現在注目されている大学の国際化及び国際カリキュラム開発と関連付けて考察し、今後学生の要望に応えるための大学の国際戦略はどうあるべきかを模索する手がかりとしたい。「英語で行う授業」の開講は、日本の大学を国際的に通用する大学へと変革するための施策の一部として、また、日本人学生の希望する教育の提供という観点からも、現在注目を集めている大学の改革項目であるとも言える。しかし、学生の実際の英語力及び学生の大学への要望と大学の現状とのギャップも重要な問題であり、今後の課題は大きい。日本人学生が英語で行う国際カリキュラムの授業に参加する体制の構築に向けての計画も含め「国際社会に対応できる人材育成」²のための取り組みはこれから発展させていくべき大学の課題であるが、これらの課題についての具体的な考察は本稿では割愛し、焦点を学生からの要望と現状についての考察に絞りたい。³現在、大学のカリキュラムの国際化は世界の大学が直面している重要な課題であり、日本人学生も「国際」「国際交流」などの言葉には敏感に反応する。今回行ったアンケート調査では、これまで表明される機会の少なかった日本人学生の大学教育への要望について垣間見ることができ、理想と現実とのギャップについても明確になった。

調査結果について考察する前に、調査結果を大学の戦略に生かすうえで焦点となる「大学の国際化」の意味と英語で行う授業を日本の大学で開講する意義について簡単にまとめておきたい。喜多村（1989：13-15）は、大学の国際的性格は、現代の大学が担っている普遍的知識や価値の探求とその教育という目的及び機能の中に基本として包含されていることを指摘している。知識、価値は自国の固有文化のみに基づくものではなく、特定の地

域や国境を越えて普遍的知識や真理を追究する国際的性格を必然的に持たざるを得ない。つまり、「いかなる大学も特定の国、国民、地域、地方の歴史、文化、社会と隔絶して存在しえず」(ibid.:15)、異質な思想や文化との接触に対して開放的である場所が大学であるべきである。大学の国際化という観点からも外国語で書かれた学術的なものを教材として使用し、授業を受講することは異なる価値観や視野からの学習を可能にし、日本人学生がこれまで接してきた思想や文化と異なる視点への接触も可能にする。さらに異なるティーチングスタイルなどに触れることも可能となり、大学教育についての新しい視野を広げることにもつながる。⁴

さらに、英語で行う授業を日本の大学で開講し、学生が受講する意義について考察してみたい。⁵ 国際共通語としての英語習得の意義は、国際競争力を持つ人材育成の観点からも大学教育で重要性を持つことはもはや議論の余地がなくなっている。中嶋(2004:182-183)の指摘するように、国際化、情報化、グローバル化の進行する中で、日本人の外国語能力、特に国際共通語となった英語の運用能力の欠如により日本が国際舞台で取り残されることへの懸念は深刻である。大学審議会もこの問題を深刻に捉えている。1998年10月、大学審議会は「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学」⁶という答申を出し、「国際舞台で活躍できる能力の育成等」の項目で、「外国語教育の充実や海外留学の推進等を進めると同時に、我が国の歴史や文化への理解、国際社会の直面する重要課題への認識を深めたり、討論、口頭による意見発表や報告、プレゼンテーション等の訓練を通じて自らの主張を明確に表現する能力を育成するなど、国際舞台で活躍できる人材の養成を図ることが重要である」と定めている。英語が国際共通語であるとする考えに基づくなら、「国際舞台で活躍できる能力の育成」で定められた目標は、単なる語学力でなく、高度な知識を英語で伝達・表現できる能力を身に付けることの有効性とも関連する。この課題は英語で行う授業の受講による成果と関連が深いといえるであろう。

また、生涯学習の観点からも広く長い視野にたつて考察すると、英語で行う授業の意義はさらに大きくなる。有本・江原(1996:94)は、大学が生涯学習機関として成立するための最も大事な点として、「単位自体を時間的、空間的、地域的に異なって取得したものをくみあわせて連携できるシステム」構築の可能性について述べている。つまり、大学の国際化とは大学で取得した単位が国際的、将来的に信用され、有用であることの重要性を指摘している。将来、日本の大学で取得した単位が国際的に通用する単位として認定され、大学や国の枠を超えて取得単位として認定されるシステムが構築されれば国際共通語である英語で受講する意味も大きくなる。

ただし、ここで明確にしておきたいのは、本稿で提起しているのは、大学の授業を全部英語にするとか、大学全体のカリキュラムをすべて変革するというのではなく、大学のカリキュラムの一部として英語で授業を行う国際カリキュラムを導入することの利点であ

る。日本人としての資質や日本の文化的価値を国際人としての資質といかに調和させていくかは、日本の教育の国際化についての議論でも行われてきており(中島2005: 3-4)、その観点からも、カリキュラム開発において日本の大学のカリキュラムと国際カリキュラムとの調和をいかにとっていかかが重要課題となるであろう。また、本稿での英語能力習得の有効性の議論は、その習得によってより多くの人とコミュニケーションがとれるようになる点や、英語による知識習得と情報普及の有効性、さらに、異なる言語で異なる思考及び分析能力をつける意義を強調したものであり、必ずしも西欧の思考が標準であるとか、西欧の研究が最先端であるという議論ではないことを明確にしておきたい。

アンケート調査方法及び調査結果

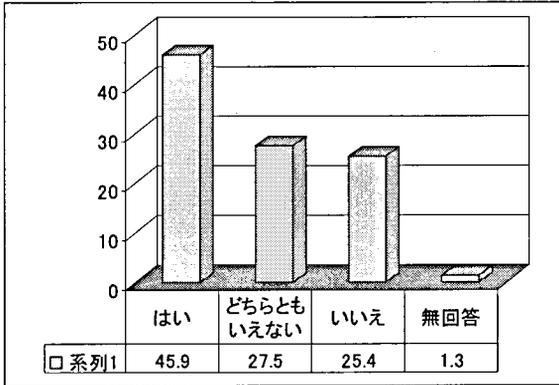
アンケート調査は広島大学全学の日本人の学部生及び大学院生を対象とした。全学部の各学年の男女になるべく偏りがなく行き渡るよう配慮して配布した。アンケートでは主に次の点について現状が把握できるよう質問をした。

- 1) 英語で行う授業を受講したいと考えている学生の割合
- 2) 受講を希望する場合の目的
- 3) 受講を希望する場合の希望する受講分野
- 4) 英語で行う授業の単位取得の希望の有無
- 5) 英語で行う授業の難易度の調節についての希望
- 6) 英語で行う授業の受講条件についての希望

結果として615名の日本人学生からの回答が得られた。⁷各質問への回答についての分析は各項目別に記載した。紙面の都合から質問項目の中でより重要と思われるものを抜粋し、本稿で取り上げた。アンケート調査全体から把握できることは、学生が理想として英語で行う授業を受講したいと漠然と希望を持っている反面、実際は英語力を伸ばすためにどこから手をつけてよいか分からず手つかずの状態になっていることである。回答者のうち約半数の学生が受講を希望し、92%にも及ぶ学生が英語力を伸ばしたいと考えているにもかかわらず、約70%の学生が英語力を伸ばすために何もしていない実態がある。今回の調査は、学生自身の掲げる理想と実際の英語力とのギャップを埋めていくために、今後大学が国際戦略と関連付けながらどのようなサポート体制を構築していくべきかを検討する参考資料となると考えられる。

(1) アンケートに答えた学生のうち、英語で行うコースを留学生と一緒に受講したいと思っている学生の人数と割合 (%)

はい		どちらとも言えない		いいえ		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
282	45.9	169	27.5	156	25.4	8	1.3	615	100.0

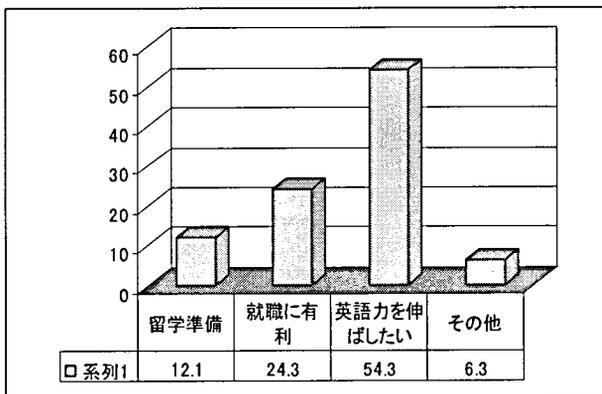


約半数の回答者が留学生と一緒に英語で行う授業を受講したいと考えている。授業が「英語で行われる」ことだけでなく、留学生と共に受講できることに興味を示していると解釈できる。単なる英語力向上でなく、留学生と交流し、国際感覚を身につけたいと考えているようである。

(2) 受講に興味を持った学生の、受講希望の理由の違いによる人数と割合

留学準備		英語力が高いと就職に有利		単に英語力を伸ばしておきたい		その他		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
72	12.1	144	24.3	322	54.3	55	6.3	593	100.0

注. 多重回答あり



英語力を高めることの重要性を認識していることが伺える。受講を希望する学生は必ずしも留学予定があるわけではない。就職に有利であることや、国際社会で活躍できる人材となるためには外国人と共に勉学することが重要であることを認識しているようである。

その他の理由をみると、具体的に自分の専門の研究に役立てるといふ学生はごく少数で、英語で行う授業を受講することにより国際感覚を身につけ、留学生の友達を作り、国際交流ができるきっかけづくりになると考えている学生が多い。また、日本の大学の授業の形式と、英語で行う授業の形式の違いにも興味を示している。これまで受講してきた日本式の授業と異なる授業を体験してみたいと考えているようである。

その他の回答(人数)

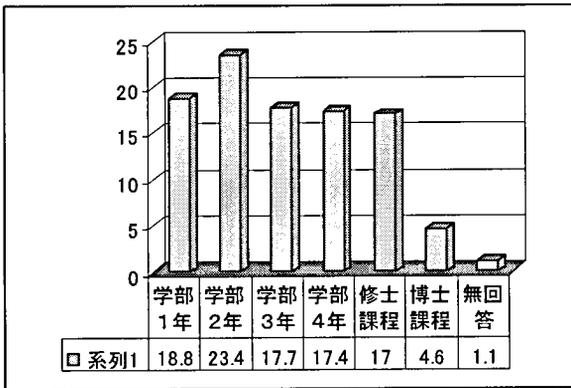
- | | |
|---|-----|
| 1 英語が好きだから。苦手だけど、基本的に好きだから。 | (5) |
| 2 留学生と交流できるから。留学生とコミュニケーションを図りたいいろいろな国の人と交流をもちたい。いろんな人に会える場になりそうだから | (5) |
| 3 面白そうだから。楽しそうだから | (4) |
| 4 興味がある | (4) |
| 5 研究のため。専門書や論文が英語で書かれているから。 | (3) |
| 6 教養として | (2) |
| 7 国際感覚を身に付けられそう。国際的に通用する人材になりたい。 | (2) |
| 8 どのようなものか知りたいし、体験したい。日本の授業とどのように違うのか知りたい。 | (2) |
| 9 経験。どんな授業が行われるか経験してみたい。 | (2) |
| 10 テンションがあがるから。ディスカッションがすぎ | (2) |
| 11 HUSA留学生がどのような授業を受けているのか知りたいから | (1) |
| 12 いつもと違う雰囲気だと面白そう。 | (1) |
| 13 英語圏のクラスに触れたい | (1) |
| 14 英語で授業をうけてみたい | (1) |
| 15 英語文献、資料を利用、作成する能力が向上するから | (1) |
| 16 海外に行きたい | (1) |
| 17 会社で必要だから。 | (1) |
| 18 興味がある。留学生と知り合う機会が欲しい。 | (1) |
| 19 興味を持ったわけではない | (1) |
| 20 偶然英語の授業だった。 | (1) |
| 21 語学をメインとしているわけではないから、より日常的に実践的な体験ができそうだから。 | (1) |
| 22 国際交流の場で専門的な単語を知っておく必要があるから | (1) |
| 23 コミュニケーション能力をつけるため | (1) |
| 24 仕事に使うので。 | (1) |
| 25 自分の英語力を確認できる。 | (1) |
| 26 将来英語が使用が必要になると思うから | (1) |
| 27 選択肢が増えることはいいことだと思うから | (1) |
| 28 そういった環境での勉強に興味がある | (1) |
| 29 その分野内容に関して新たな分野の発見になりそうだから | (1) |
| 30 大学にはいってから英語に触れる機会がへったから | (1) |
| 31 どの程度わかるか、学習者の気持ちがわかりたい。 | (1) |
| 32 内容に興味がある。留学生に日本文学の内容など | (1) |
| 33 日常生活の中の英語を学べる、留学生の友だちがほしい | (1) |
| 34 留学生と一緒に授業を受けてみたい | (1) |

(3) 留学生と一緒に受講を希望した学生の1) 学部(学年別)／大学院修士・博士別割合、及び 2) 男女による人数と割合

1) 学部(学年別)／大学院修士・博士別割合(学部1, 2, 3, 4は学年を指す)

学部				大学院				無回答		合計					
1		2		3		4		修士課程		博士課程		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
53	18.8	66	23.4	50	17.7	49	17.4	48	17.0	13	4.6	3	1.1	282	100.0

注. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒にの授業を希望した学生の人数は282名

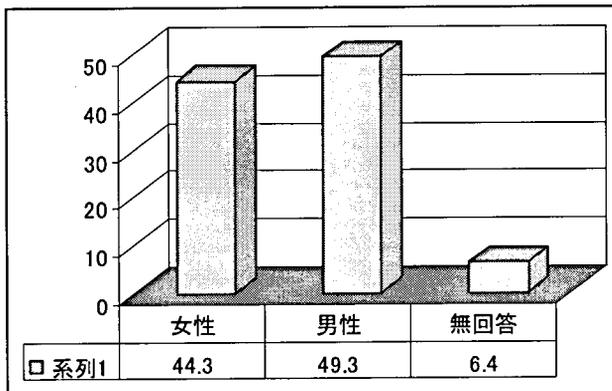


学部、大学院、学年を問わず、留学生と共に英語で行う授業の受講を希望している様子が伺える。

2) 男女の割合

女性		男性		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
125	44.3	139	49.3	18	6.4	282	100.0

注. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒にの授業を希望した学生の人数は282名



男女を問わず、受講を希望している。

(4) 留学生と一緒に受講したいと答えた学生の、英語能力による人数・割合
(TOEFL, TOEIC, 英検)

英語レベル		人数	%
TOEFL	499点以下	16	5.7
	500-549	19	6.7
	550-579	11	3.9
	580-599	2	0.7
	600-630	1	0.4
	640点以上	0	0.0
TOEIC	500点以下	54	19.1
	500-599	27	9.6
	600-699	30	10.6
	700-799	32	11.3
	800-899	9	3.2
	900点以上	1	0.4
英 検	一級	2	0.7
	準一級	16	5.7
	2級	62	22.0
合 計		282	100.0

TOEFL, TOEIC とも、点数のあまり高くない学生でも受講を希望している。「英語力の低い学生が受講を希望している」と解釈するより、受講を希望している学生の中に英語力の高い学生が少ない、つまり日本人学生全体の英語力が低い、と解釈した方がよいであろう。

注1. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒にの授業を希望した学生の人数は282名
注2. 無回答、複数回答あり

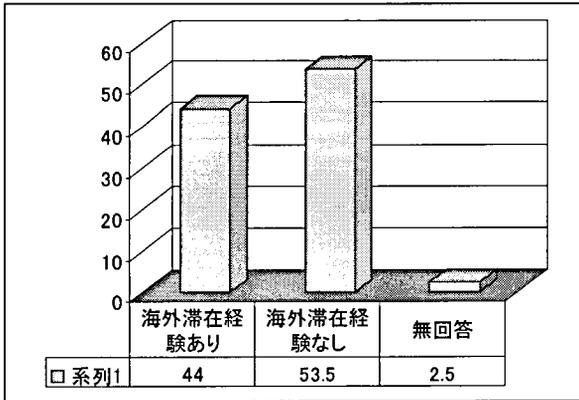
英語力から判断して懸念されることは、大多数の学生の実際の英語力では英語で行う授業の受講が困難であり、英語で行う授業を受講できるレベルに達することができるよう施策を講じていく必要がある。現実的には、今後大学の戦略としてかなり真剣な取り組みが必要であると考ええる。

(5) 留学生と一緒にの授業を希望した学生の 1) 海外滞在経験の有無、2) 滞在期間と 3) 海外滞在の理由の違いによる人数・割合

1) 海外滞在経験有無

海外滞在経験有り		海外滞在経験なし		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
124	44.0	151	53.5	7	2.5	282	100.0

注. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒にの授業を希望した学生の人数は282名

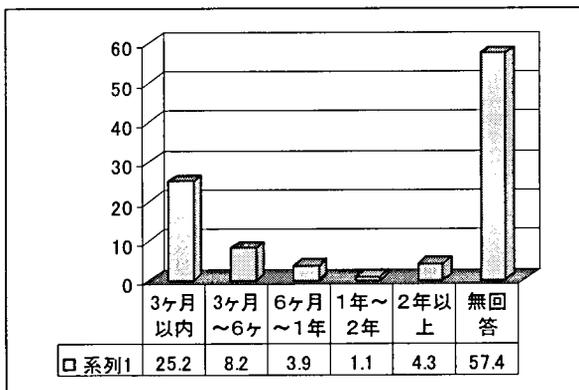


海外滞在の経験の有無に関わらず留学生と一緒に授業の受講を希望している。さらに、海外滞在経験のない学生の方が海外滞在経験のある学生の数より多いことからこのような結果になったと考えられる。

2) 海外滞在期間

滞在期間	人数	%
3ヶ月以内	71	25.2
3ヶ月～6ヶ月	23	8.2
6ヶ月～1年	11	3.9
1年～2年	3	1.1
2年以上	12	4.3
無回答	162	57.4
合計	282	100.0

注. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒に授業を希望した学生の人数は282名



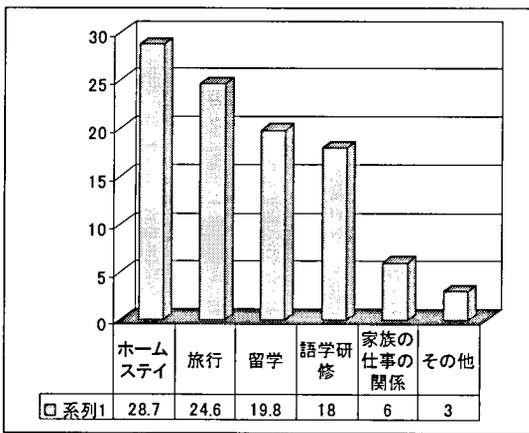
「海外滞在期間が短い学生の方が受講を希望している」と解釈するより、学生は海外滞在経験と関係なく受講を希望しており、滞在期間が短い学生の数が多いといえる。

3) 海外滞在の理由

滞在期間	人数	%
ホームステイ	48	28.7
旅行	41	24.6
留学	33	19.8
語学研修	30	18.0
家族の仕事の関係	10	6.0
その他	5	3.0
合計	167	100.0

注1. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒にの授業を希望した学生は282名

注2. 無回答、複数回答あり



海外滞在の理由を見ると、ホームステイが一番多く、続いて旅行、留学、語学研修となっている。

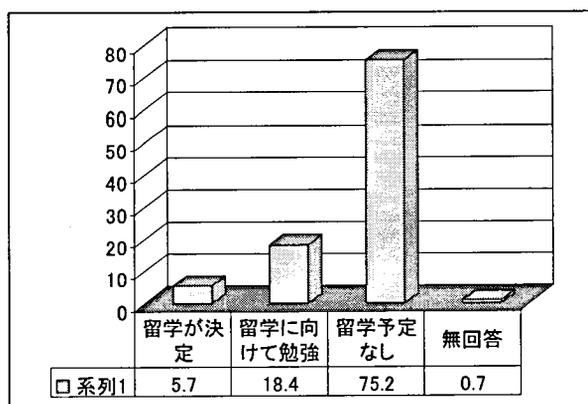
その他の回答(人数)

- | | |
|------------|-----|
| 1 学会(国際会議) | (2) |
| 2 高校に通った | (1) |
| 3 日本語インターン | (1) |
| 4 仕事 | (1) |

(6) 留学生と一緒にの授業を希望した学生のうち、留学の予定のある学生の人数・割合

留学することが決定している		決定はしていないが、留学に向けて勉強している		留学する予定はない		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
16	5.7	52	18.4	212	75.2	2	0.7	282	100.0

注. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒にの授業を希望した学生は282名



受講を希望する学生のうち、留学することが決定している学生と留学に向けて勉強している学生の割合は約25%に過ぎず、学生が英語で行う授業を希望している理由は必ずしも留学を目的とするものではないことがわかる。

(7) 受講を希望する授業の分野の人数・割合

滞在期間	人数	%
国際関係	195	16.6
教育	167	14.2
文学	97	8.3
社会学	94	8.0
工学	93	7.9
日本研究(日本社会・文化など)	84	7.2
経済学	84	7.2
文化人類学	80	6.8
理学	68	5.8
法学	61	5.2
アジア研究	44	3.8
数学	32	2.7
医学	28	2.4
その他	19	1.6
生産生物	17	1.5
歯学	9	0.8
合計	1172	100.0

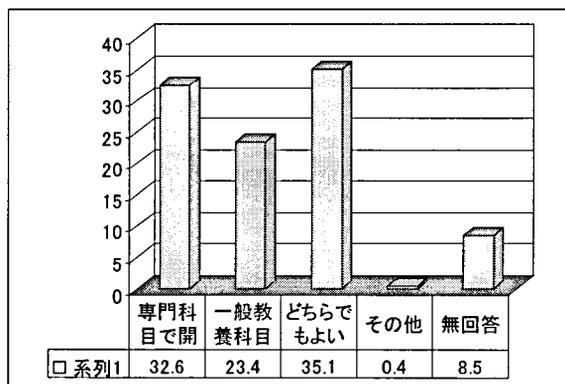
その他の回答(人数)	
1 心理学	(4)
2 スポーツ	(2)
3 スポーツ実習	(2)
4 映画	(1)
5 映像ビジネス	(1)
6 言語学	(1)
7 宗教学、神学	(1)
8 生活・文化	(1)
9 生活知識	(1)
10 西洋史学	(1)
11 地理学	(1)
12 日常生活会話	(1)
13 ビジネス	(1)
14 美術・芸術	(1)

注. 複数回答あり

(8) 留学生と一緒に授業を受講したいと答えた学生のうち、専門分野の授業の受講を希望する学生と、一般教養科目の受講を希望する学生と、どちらでもいいと考えている学生の人数・割合

専門科目で開講してほしい		一般教養科目として開講してほしい		どちらともかまわない		その他		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
92	32.6	66	23.4	99	35.1	1	0.4	24	8.5	282	100.0

注. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒にの授業を希望した学生の人数は282名



一見専門科目での開講を希望する学生が多いように見えるが、専門科目で開講するか一般教養科目で開講するかの希望については、学部生及び大学院生の学年ごとの綿密な調査が必要であろう。

その他の回答(人数)

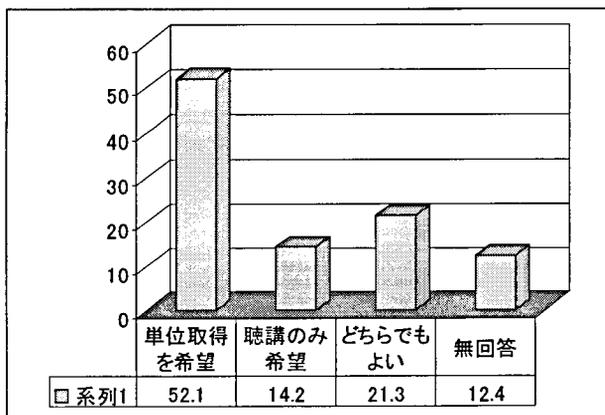
外書購読への良いきっかけとして (1)

(9) 留学生と一緒にの授業を受講したいと答えた学生のうち、1) 専門科目または2) 一般教養科目ごとの、単位取得を希望する学生と、聴講を希望する学生と、どちらでもかまわないと答えた学生の人数・割合

1) 専門科目の場合

単位取得できることを希望		聴講のみを希望		どちらでもかまわない		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
147	52.1	40	14.2	60	21.3	35	12.4	282	100.0

注. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒にの授業を希望した学生の人数は282名

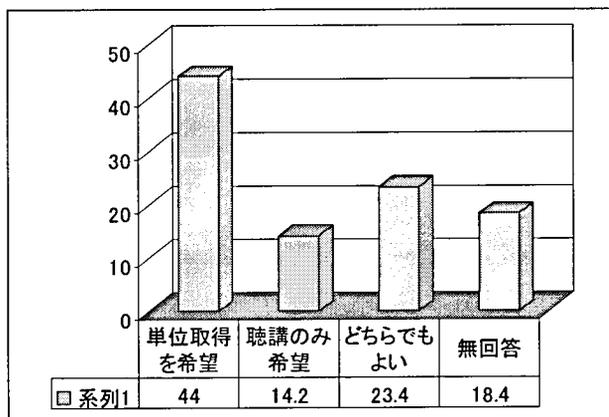


専門科目で開講された場合、単位取得を希望する学生が半数に上る。聴講よりも本格的に単位取得に向けて勉強したいと考えているようである。

2) 一般教養科目の場合

単位取得できることを希望		聴講のみを希望		どちらでもかまわない		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
124	44.0	40	14.2	66	23.4	52	18.4	282	100.0

注. 回答者(615名)のうち、留学生と一緒に授業を希望した学生の人数は282名



一般教養科目の場合、専門科目で開講された場合と比較して単位取得を希望する学生数は若干下回るが、約半数が単位取得を希望している。単位取得を重要視していると解釈できる。

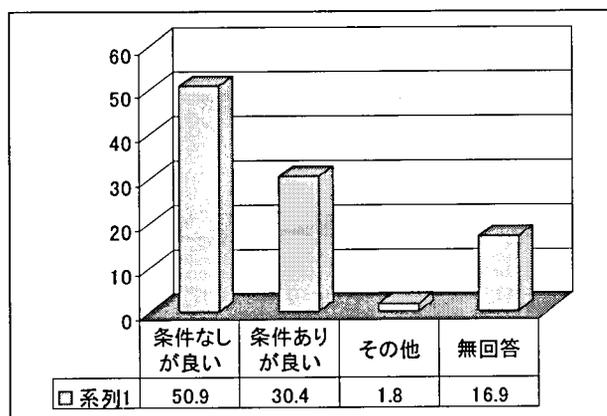
(10) 開講予定リストのうち、各科目ごとの受講希望数

	授業名			人数	%
	Cluster	Course Title	コース日本語名		
秋学期開講予定	Culture	Intercultural Communication	異文化コミュニケーション	193	12.2
	Culture	Family Life in Japan	日本の家族	138	8.7
	Culture	Japanese Society and Gender Issues	日本社会とジェンダー	91	5.8
	Culture	Seminar in Japanese Culture and Education	日本文化と教育セミナー	81	5.1
	Culture	Conceptual Analysis of Communicative Competence	コミュニケーション能力概念分析	73	4.6
	Culture	Philosophy of Language	言語哲学	72	4.6
	Business	Japanese Economy	日本経済	71	4.5
	Culture	Seminar in Multicultural Art Education	多文化芸術教育セミナー	55	3.5
	Culture	Cultural Aspect of Science Education in Japan	日本の科学教育の文化的考察	37	2.3
	Science	Plant Biology	植物生物学	34	2.2
	Biotechnology	Current and future states of the researches in the Fisheries Science	水産業科学の研究の現状と将来	20	1.3
春学期開講予定	Culture	Development and International Education	開発と国際教育	88	5.6
	Culture	Cross-Cultural Studies on Education	教育における異文化研究	72	4.6
	Culture	Japanese History: Pre-modern and Modern Times	日本史:近現代	71	4.5
	Culture	Japanese Linguistics from Contrastive Perspective	比較日本語学	64	4.1
	Culture	Internship	インターンシップ	60	3.8
	Science	Modern Chemistry	現代化学	59	3.7
	Culture	Japanese Language and Literature, and Teaching Methods for Natives	母国語者のための日本語・日本文学・教授法	53	3.4
	Culture	Material Development for Multicultural Education	多文化教育開発	49	3.1
	Biotechnology	Recent Developments in Biological Sciences	生物科学の発展	38	2.4
	Science	Frontiers of Material Science	物質科学フロンティア	38	2.4
	Biotechnology	Introduction to environmental ecology and economy	環境生態学・経済学概論	36	2.3
	Science	Mathematical Structures	数理構造	36	2.3
	Science	Psychophysics Toolbox and MATLAB programming	心理物理ツールボックスとMATLABプログラミング	35	2.2
	リスト以外に受けてみたい授業		米国のリハビリテーションについて		2
		道徳		1	0.1
		教育方法学		1	0.1
		社会学		1	0.1
		行動経済学		1	0.1
		デザイン		1	0.1
		Frontiers of Life Science		1	0.1
		molecular biology		1	0.1
		physics		1	0.1
		psychology		1	0.1
		体育		1	0.1
		近代建築。		1	0.1
		物理数学		1	0.1
		日本の農村と里山のフィールドワークと環境		1	0.1
		コンピューター関係		1	0.1
	合計		1580	100.0	

注. 複数回答あり

(11) 受講条件 (TOEFL 520点など) の受講条件を希望する学生と、条件なしを希望する学生の人数・割合

条件なしが良い		条件があったほうが良い		その他		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
313	50.9	187	30.4	11	1.8	104	16.9	615	100.0



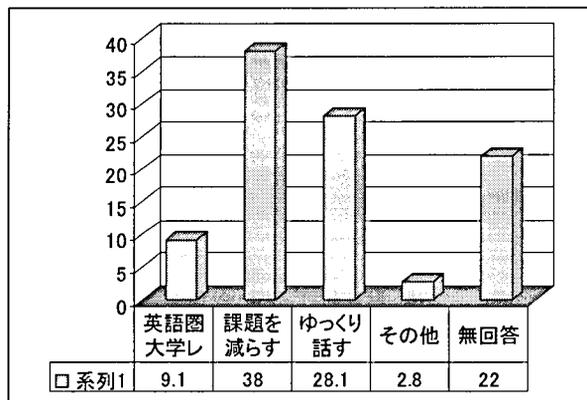
受講条件なしを希望する学生が半数を占める。受講し易くする意向から条件設定をあまり厳しくしないよう希望する傾向があるが、問題は容易な受講条件で英語で行う授業の受講が実際に可能かである。学生の英語力と授業レベルとのバランスをどうとるのが重要課題である。

その他の回答

- 1 TOEFL はお金がかかるからなかなか受けない。
- 2 TOEFL 以外にも基準を決めて欲しい。
- 3 どちらでも良い。
- 4 同じ程度の英語力を持った人間が集まると授業の効率が向上すると思う。
- 5 開講するからには、ある程度の学生確保が必要だと思う。しかしこの条件(TOEFL 520点)は少し高すぎるかもしれないので、あまり受講する人がいなくなるのではないか。
- 6 授業によって点数を変える。
- 7 授業のレベルが保たれる。
- 8 受講条件ではなく、授業のレベルとして提示してはどうか。
- 9 受講するか否かは学生自身が決めるのは当たり前。
- 10 条件無しでよいが、必要英語レベルの目安の提示という形で残すべき。
- 11 もう少し下げた方が受講しやすい雰囲気が良いと思う。

(12) 授業の難易度で、英語圏の大学レベルを希望する学生と、日本人学生用に課題を減らす、または日本人学生用にゆっくり話すことを希望する学生の人数・割合

英語圏の大学レベルを希望		日本人学生用に課題を減らすことを希望		日本人学生用にゆっくり話すことを希望		その他		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
56	9.1	234	38.0	173	28.1	17	2.8	135	22.0	615	100.0



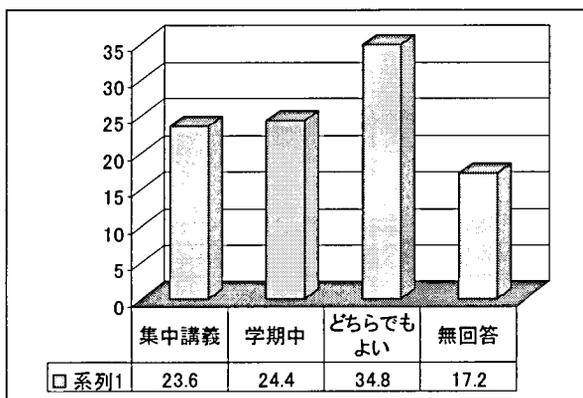
日本人学生用に課題を減らし、ゆっくり話すことを希望する学生が66%を占めており、英語圏の大学レベルでは授業についていくことが困難である現実を把握しての回答といえる。しかし、約9%は英語圏の大学レベルの授業を希望しており、挑戦してみたいと考えているようである。

その他の回答(人数)

- 1 日本人向けで、課題少なめがよい (5)
- 2 英語圏大学レベルと日本人向けの両方を満たすようにして欲しい。 (4)
- 3 難易度によってコースわけ。できればレベル別で開講されると聴講しやすくなると思う。 (2)
- 4 わかりやすく言ってほしい。 (1)
- 5 やる気は1、実際は2でしょうね (1)
- 6 習熟度によるとおも (1)
- 7 実際に使える、わかるようにしてほしい。 (1)
- 8 簡単なものにしては、あまり意味がないように思います。 (1)
- 9 ヴァイタリティーがあるほうがいい (1)

(13) 希望する開講時期の違いによる割合

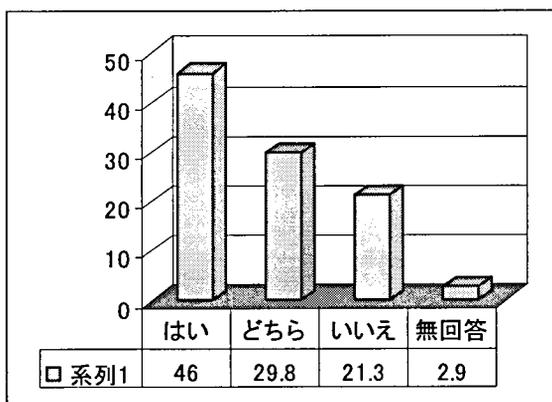
集中講義(夏季休暇・冬季休暇中など)のみ		学期中のみ		どちらともかまわない		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
145	23.6	150	24.4	214	34.8	106	17.2	615	100.0



開講時期については休暇中の集中講義を希望する学生と学期中のみを希望する学生とで希望が分かれ、どちらでもかまわない学生は35%であることから、開講形式に関する希望は様々であることが分かる。

(14) 体験授業の受講を希望する学生の人数・割合

はい		どちらとも言えない		いいえ		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
283	46.0	183	29.8	131	21.3	18	2.9	615	100.0



約半数の回答者が、体験授業を希望しているのは興味深い。英語圏の大学での授業を体験した経験がなく、興味深さから実際に体験してみたいと考えているのであろう。

受講希望の学生数と、体験授業の受講を希望している学生数がほぼ同じであることから、英語で行う授業の体験授業希望者のほとんどが授業の受講を希望していると考えられる。

(15) 体験授業を希望した学生の、英語能力による人数・割合
(TOEFL, TOEIC, 英検)

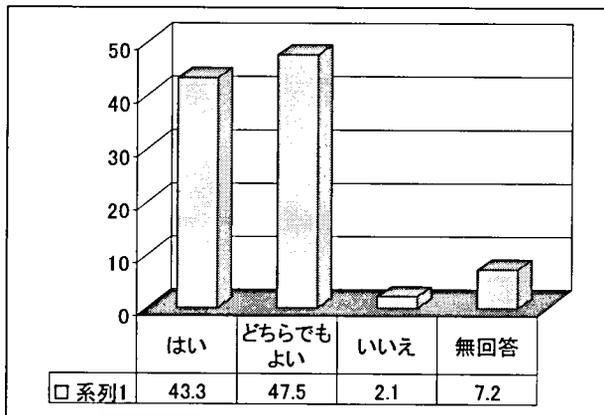
英語レベル		人数	%
TOEFL	499点以下	14	4.9
	500-549	14	4.9
	550-579	11	3.9
	580-599	2	0.7
	600-630	2	0.7
	640点以上	0	0.0
TOEIC	500点以下	61	21.5
	500-599	30	10.6
	600-699	33	11.6
	700-799	30	10.6
	800-899	10	3.5
	900点以上	0	0.0
英 検	一級	2	0.7
	準一級	14	4.9
	2級	59	20.8
その他	国連英検C級	1	0.4
	ケンブリッジ英検	1	0.4
合 計		284	100.0

一見英語能力の低い学生の方が体験授業を希望しているかに見えるが、そう解釈するよりも、実際の英語力に関わらず一般的に学生は体験授業を希望しており、大半の学生の英語力は低いと解釈すべきであろう。

注1. 回答者(615名)のうち、体験授業を希望した学生の人数は283名
注2. 無回答、複数回答あり

(16) 国際交流ラウンジを希望する学生の割合

はい		どちらでもよい		いいえ		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
266	43.3	292	47.5	13	2.1	44	7.2	615	100.0

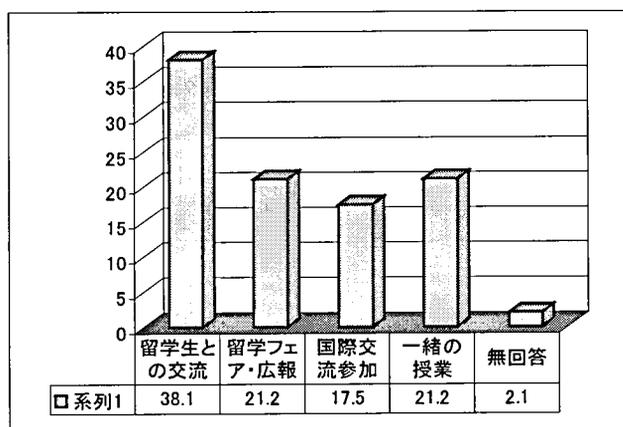


国際交流ラウンジを希望する学生は約半数にのぼり、国際交流の機会を求めている学生が多数いることが考えられる。

(17) 留学生センターに希望する事項別の人数・割合

留学生との交流の場を増やしてほしい		留学フェアなど、もっと広報してほしい		留学生の参加する国際交流に参加させてほしい		留学生と一緒に授業を作してほしい		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
309	38.1	172	21.2	142	17.5	172	21.2	17	2.1	812	100.0

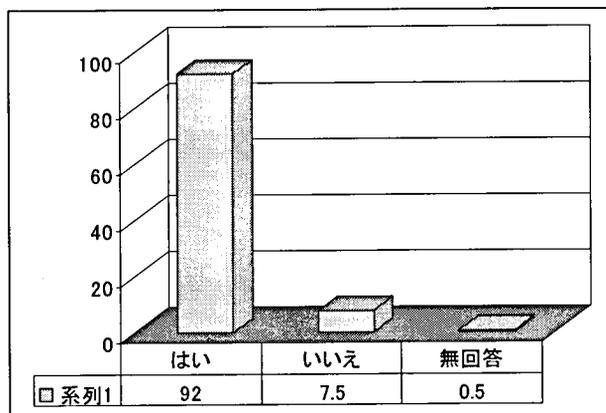
注. 複数回答あり



留学生との交流の場を求めている学生は多いことが分かる。近年大学内での国際交流の場は国際ボランティア等を通じて増えてきてはいるが、広報も含めより促進していく必要がある。また留学生と共に授業が受講できる体制作りも今後の大学の課題といえる。

(18) 全体で英語力をのばしたいと答えた学生の割合

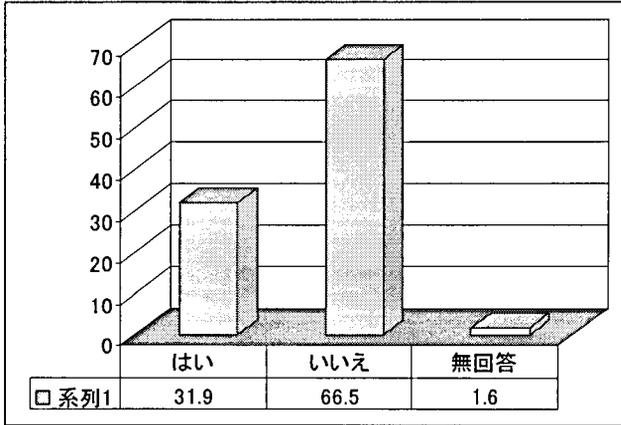
はい		いいえ		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
566	92.0	46	7.5	3	0.5	615	100.0



92%にも及ぶ学生が英語力を伸ばしたいと回答しており、英語力向上は学生が理想として掲げる目標であることがわかる。

(19) 英語力をのぼしたいと答えた学生のうち、何かしているまたは何もしていないと答えた学生の割合

はい		いいえ		無回答		合計	
人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
196	31.9	409	66.5	10	1.6	615	100.0



英語力を伸ばしたいと回答した学生のうち、何もしていない学生が66.5%にも及ぶ実態をみると学生が夢に描く姿と現実にはかなり差があることが分かる。実際には英語学習の手がかりがつかめない可能性がある。また到達目標への道のりが長すぎて途中で挫折している可能性もある。

(20) 英語力を伸ばしたいと答えた学生のうち、各該当項目の割合

英語力を伸ばすためにやっていること	人数	%
ラジオ英会話を聞く	11	2.6
TVの英会話番組をみる	41	9.5
TVの英語ニュースを聴く	34	7.9
英字新聞を読む	23	5.3
英語で書かれた本・雑誌を読む	74	17.2
英会話学校に通っている	24	5.6
留学生と交流する	30	7.0
TOFEL・TOEIC・英検などの問題集をする	112	26.0
CD付の英語習得のための本・雑誌で勉強する	81	18.8
合計	430	100.0

注1. 英語力を伸ばすために何かしていると答えた回答者は196名

注2. 複数回答あり

大学国際化の今後の展望と日本人学生

アンケート調査から、日本人学生は英語で行う授業の受講が可能となることを希望し、英語で行う授業の受講を国際社会に対応できる人材となることと関連付けて考えていることが分かる。問題は、明確な目標設定のされた国際カリキュラムが大学で構築されていないことと、それに到達する現実的手段が学生にとって明確でないことである。学生自身が英語力の向上を希望しながらも、何から手をつけてよいかわからず戸惑っているのが現状であり、実際は英語で行う授業を受講できるレベルに到達するまでの道のりは長い。文部科学省から提案された「国際舞台で活躍できる能力の育成等」、「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」、「英語が使える日本人の育成のための行動計画」等の答申⁸に挙げられた目標は、実際に広島大学の日本人学生が自ら目標として掲げていると言える。将来的に短期交換留学プログラムで留学生用に開講されている英語で行う授業を日本人学生にも開講していくことで、日本人学生の要望に応えられるシステムを構築できるが、そのレベルに到達するまでの準備段階として学生の実際の英語力に見合ったレベルの授業を中間点として提供することが必須であろう。

その点で現在注目されている Web-CT 等の e ラーニングを活用した授業の提供は、即英語による授業の受講が可能でない学生にとって有効なプログラムとなり得る可能性がある。現在、高等教育における情報通信技術の活用による教育提供が促進され、インターネットを活用した e ラーニングによる国際的共同プログラム開発は全世界で注目されている。例えば、吉田（2003：15-16）は、Green（2001）の研究に言及し、アメリカの高等教育機関で e ラーニングのコースを配信している機関は、2002年の時点で62.5%に上昇していることを述べている。英語圏での英語による授業を受講できるレベルに到達するための施策として広島大学で思案されたのは、大学の国際ネットワークを利用して、e ラーニングにて一段階難易度を下げた授業を提供し、学生にまず体験をしてもらうというものである。大学が時空を越えた生涯学習機関として存続していくためにも、このような国際連携を利用した国際的共同カリキュラムの開発は大学が発展させていくべき分野であり、広島大学でも模索中である。広島大学は自身がメンバーである大学コンソーシアム INU（International Network of Universities）を通じて、海外の大学と共同で情報通信技術を活用したプログラム作りを進めている。

例えば、Web-CT を使用した英語で行われる教養科目等の開講が実現できれば、英語力が足りない学生でも難易度の低いレベルから導入を図ることができ、より多くの学生の可能性を引き伸ばせることが考えられる。e ラーニングの場合、講義のサイトを予習用にして講義内容を理解する準備をしたり、講義後、復習して自分の講義の理解度を確認

できたりなど、繰り返し有効に活用できる利点がある。このように、広島大学では、即英語による授業を受講するレベルの英語力を持たない学生が、難易度を調整した Web-CT による教材で勉強し、後ほど実際に英語で講義を受けて自分の理解力を確認できるような、導入のためのプログラム作りの検討を行っている。今後は、日本人学生が HUSA プログラムの留学生向けの英語で行う授業を受講する条件として Web-CT の授業の受講を必須とするなど、段階を追ったカリキュラム構築に向けてより制度を整えていく必要がある。

今回のアンケート調査から、学生は、国際社会に通用する英語運用能力を身につけることに加え、国際レベルのアカデミック能力を習得することの重要性も認識していることが分かった。国立大学が法人化し、大学の自治力が試される中、英語で行う授業の日本人学生への開講は、国際共通語となった英語の運営能力を身につけるとともに、単なる語学能力としての英語だけでなく、幅広い知識習得や情報の普及を可能にし、異なる思考を学ぶ観点からも、今後注目される大学の国際戦略の発展的分野であるといえる。広島大学の短期交換留学プログラムは毎年発展を続け、近年は40名～50名の留学生が一年または半年単位で広島大学に留学してきている。⁹ 単位互換を促進するためにも受け入れ留学生に向けて国際通用性のあるカリキュラムの構築が重要な課題であるが、同時に日本人学生用の国際カリキュラム開発が推進されていくべきであると考え。19カ国もの学生が一つのプログラムに在籍する HUSA プログラムは、まさに日本の大学内で形成された国際的コミュニティである。¹⁰ したがって、国際標準のカリキュラムの提供は、留学生および日本人学生双方にとりメリットのあるカリキュラム構築につながることを認識し、大学のカリキュラムの一部としてその構築の可能性を模索していくことが大切なのではないかと考える。

大学は現在国際競争力を問われている。喜多島 (2002: 95-96) が指摘するように、学生募集の国際競争で重要な決め手となるのは、諸外国と比較した場合の日本の大学の魅力と、教育と研究における国際的競争力、単位や学位の国際的適用性である。短期交換留学プログラムで開講されている英語による授業は、日本人学生と留学生が共に国際通用性のある知識習得を目指す場の提供という観点からも将来大学が国際市場に向けて展開できる分野となる可能性がある。国際競争力のある大学経営の観点からも、大学での勉学が将来及び世界へとつなげられるシステムの構築の重要性は今後より注目されるであろう。日本人学生の将来を考えた大学の国際戦略の一部として、幅広い視野から英語による授業の日本人学生への開講が捉えられ、今後発展していくことを願う。

注

- 1 この調査は2004年度学長裁量経費にて行った。
- 2 文部科学省は、国際展開基盤強化（大学戦略）の一環として「国際競争力のある高度な人材養成の拠点整備の推進」を掲げ推進している。
- 3 日本人学生向けの国際カリキュラム開発についての考察は、本稿では割愛した。また、広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）向けに開講されている英語で行う授業の、国際スタンダードを目標にした国際カリキュラムへの発展については、広島大学留学生センター発行の「留学生教育」第10号（2006）に掲載予定である。
- 4 日本人学生が留学生と共に英語で行う授業を受講するカリキュラムが構築されれば、多様な授業スタイルも目の当たりにする機会を持つこととなり、学生が受け身になりがちな日本のスタイルと異なる教育方法があることも学ぶことができる。
- 5 「大学国際戦略：大学カリキュラムの国際化・グローバルスタンダード化における諸問題～短期交換留学プログラムの英語による授業の国際カリキュラム化～」（広島大学留学生センター発行「留学生教育」第10号掲載予定）参照。
- 6 大学審議会答申（1998年10月）http://www.k-kentan.ac.jp/shokei/shok_data1.html 参照。
- 7 広島大学学生の人数は2004年12月の時点で学部生が約11000人、大学院生が約4300人であるので、回答した学生の全体での割合は4%と少ないとはいえる。厳密に広島大学学生の意向を反映した結果を得るためにはより多くの学生からの回答が必要となるが、今後の調査の準備段階として広島大学学生の動向について把握する意味からは、今回のアンケート調査は意義のある調査であったと考える。
- 8 大学審議会答申（1998年10月）http://www.k-kentan.ac.jp/shokei/shok_data1.html 参照。
- 9 広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）では、2003-2004年度に46名、2004-2005年度に42名、2005-2006年度には50名の留学生を協定大学より受け入れた。
- 10 2005年10月の時点でHUSAプログラムの協定大学数は19カ国47大学（University Studies Abroad Consortium [USAC] を含む）である。USACを通じてHUSAプログラムに参加できる学生を含めると大学数は47大学を上回る。

引用文献

有本章・江原武一編（1996）『大学教授職の国際比較』玉川大学出版部

喜多村和之（2002）『大学は生まれ変わるかー国際化する大学評価のなかで』中公新書

喜多村和之（1989）『大学教育の国際化ー外からみた日本の大学（増補版 第2刷）』

玉川大学出版部

大学審議会答申（1998年10月）http://www.k-kentan.ac.jp/shokei/shok_data 1.html

中嶋嶺雄（2004）『21世紀の大学－開かれた知の拠点へ』論創社

中島智子（2005）「異文化間研究と『日本人性』」『異文化間教育研究』No.22, pp.2-14

吉田文（2003）『アメリカ高等教育における e ラーニング－日本への教訓』東京電機大学
出版局

Kenneth C. Green (2001) "The 2002 National Survey of Information Technology in USA
Higher Education,"The Campus Computing Project.

[<http://www.campuscomputing.net>]

謝辞

データ処理において、林炫情（イムヒョンジョン）（調査時日本学術振興会外国人特別
研究員及び広島大学客員研究員）先生より貴重な助言と御協力をいただきましたこと、感
謝の意を記します。また、アンケート調査表作成に当たり学生の立場から所見をいただ
いた広島大学学生及びアンケート配布と集計に御協力いただいた学生にも感謝の意を記し
ます。